プレゼント

「おい、見ろ。あの星で、しきりに核爆発が起っている」
「そうか。文明がその段階に達したとなると、ぐずぐずしているわけにいかない。では、早いところ、例のものを送りつけることにしよう」
宇宙の一角にあるラール星の住民たちは、こんなことを話しあい、やがて一台の宇宙船を発射した。

「なんだ、あれは。妙なものが現れたぞ」
と、ひとりが空を指さしながら叫んだ。
「飛行物体のようだな」
「たぶんね。知りたいのは、どこの星から発射され、なんの目的でこの地球に飛んできたかだ」
「わかるものか。なかに入っているものが判明するまでは」
だれもが空を見あげて大さわぎをしているうちに、それは郊外の原っぱに落下した。

正体不明の飛行物体が、地球製のものでないことは、すぐにわかった。それは、あまりにも大きかったのだ。百階建てのビルぐらいあった。人びとは首をかしげ、好奇心と不安のまざった視線を集中しつづけた。

そのうち、その銀色の物体の一部に音がした。きしむような響きとともに、ドアらしきものがゆっくりと開いた。

「いよいよ、なにか出てくるらしい」

「どんなやつだろう」

あたりの緊張は高まった。しかし、その静けさはすぐにおわった。いっせいに悲鳴がおこったのだ。

「危ない。逃げろ」

「なんと恐ろしい怪物だろう。ふみつぶされるぞ」

たしかに、怪物としか呼びようがなかった。トカゲとカバとをいっしょにしたような姿だったが、ちょっとしたビルほどの大きさで、太い六本の足でのそのそと歩きはじめた。そして、歩くたびに、足の下にあった物は、なにもかもふみつぶされた。しかも、一匹でなく、十匹ちかく現われた。

色はさびた鉄のような色だった。色ばかりでなく、丈夫さも鉄ぐらい、いや、それ以上だった。だれかが反射的に銃をむけて引金をひいたが、弾丸は皮膚ではねかえされた。

ただちに非常警戒網がはられた。人びとは避難し、かわって、遠まきに武器が用意された。

「ねらえ。うて」

バズーカ砲が、つづけざまに発射された。だが、怪物はいっこうにひるまなかった。

「だめだ。ミサイルを使おう」

しかし、ミサイルも、あまり効果をあげなかった。怪物たちは大きいくせに意外に動きがすばやく、巧みに身をかわされて、なかなか命中しなかった。身をかわされるたびに、その下敷きになって、いくつかの建物が押しつぶされた。

とても、一国だけの手に負える相手ではなかった。各国に応援が求められ、各国はそれに応じた。ほっておいたら、世界じゅうが荒らされてしまいそうに思われたのだ。すでに、怪物たちは繁殖をはじめるけはいを示している。

国際間の対立は、もちろんたなあげとなり、怪物問題にすべての力が集められた。情報と研究が交換され、あらゆる科学力が動員された。高圧の電流を通じた鉄条網が張られ、各種の毒を入れたえさがまかれ、地雷が埋められ、催眠ガスが使用された。このうちのどれが有効だったのかわからないが、あばれつづけていたさすがの怪物たちも、ついにまいった。

みなはほっとし、手を握りあいながら、話しあった。

「やっと退治できた。大きくて強いが、それほど利口でもなかったようだ」

「ああ、一時は、どうなることかと思った。とんでもない怪物を、おくりつけてきたものだ

な。だが、これで安心とはいえまい。これからも、あることにちがいない。われわれは地球上での争いは打ち切りにして、宇宙からの相手にそなえなければならないだろう」

「その通りだ。考えてみれば、いままでの原水爆の実験競争など、実にばかばかしいことだった。そのようなくだらないことは、こんご二度としないことにしよう」

「そのご、核爆発は認められません」

ラール星の天文台は、こう発表した。

「よかった。われわれの心のこもった贈り物が、役に立ったようだ」

「当り前さ。こんなかわいい生物を見たら、だれだって心がなごやかになり、殺気だった気持ちも静まってくる。あの星の住民たちも、いまごろは、さぞ喜んでいることだろう」

こう話しあいながら、ラール星の巨大な住民たちは、足もとにじゃれつく六本足のペットたちの頭を、目を細めてなでた。